様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３３８０３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２４３５

研究課題名（和文）海外の小規模自助グループにおける継承語としての日本語教育

研究課題名（英文）Japanese Education as a Heritage Language in Small-Scale Self-Help Groups Overseas

研究代表者
谷口　ジョイ（Taniguchi, Joy）

静岡理工科大学・情報学部・准教授

研究者番号：８０７３９２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：海外に居住する「日本にルーツをもつ子どもたち」が，継承日本語を学ぶ場としては，教育機関や家庭のほか，保護者が運営する小規模なグループが挙げられるが，その実態についてはこれまで明らかにされていなかった．本研究では，アラブ首長国連合，オーストラリア，韓国における保護者主体の日本語学習コミュニティにおいて参与観察，及び保護者に対するインタビューを実施し，こうしたグループでどのような教育活動が行われ，どういった運営上の課題に直面しているのかを明らかにした上で，子どもたちの言語使用について，その主体性，創造性について検討を加えた．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，海外在住の「日本につながる子ども」が，継承語である日本語の育成を目指すコミュニティへの参加を通して，どのように日本語を習得するのかを調査したものである．子どもたちの継承語教育に関しては，日本人学校や補習校を対象とした調査が多く，保護者主体のグループについては，その実態が不明であったが，本調査により，グループにおける教育活動，保護者が直面する課題，また子どもたちの多言語使用について明らかにすることができた．

研究成果の概要（英文）：Some Japanese children living overseas attend to small-scaled groups which are run by parents to learn Japanese as a heritage language. However, the actual situation has not been clarified until now. In this study, ethnographic observations and interviews with participants were conducted in heritage language learning communities in the United Arab Emirates, Australia, and South Korea in order to clarify what kind of educational activities they have and what kind of administrative challenges they face. In this study, we also examined the participating children's self-directed creativity in using language.

研究分野：バイリンガリズム

キーワード：継承語　継承語教育　日本語教育　海外子女　日系コミュニティ　多言語使用　トランスランゲージング　質的研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初，既に海外日系コミュニティを取り巻く環境は多様化，複雑化しており，海外に暮らす「日本につながる子ども」に対する継承語教育もまた転換期を迎えていた．一方，多くの国や地域において，こうした児童の継承語教育に対する行政支援は十分とは言えず，継承語の育成は各家庭のリソース（時間・労力・費用）に大きく委ねられているというのが現状であった．

(2) これまでは複数言語を併用する児童の言語能力をモノリンガル児童と比較した上で，その差異に焦点を当てた分析がなされてきた．また，複数言語の混在，交差使用（コード・スイッチング）を否定的に捉える傾向があった．こうした背景には「バイリンガルとは，モノリンガルの言語能力を両言語において兼ね備えている」という点から研究が行われてきたという経緯がある．

(3) 研究開始時において，海外在住の子どもたちに対する継承日本語教育に関しては，日本人学校や週末の補習校，あるいは個別の家庭を対象とした研究が主であり，筆者が知る限り，保護者によって運営される小規模なグループを対象としたものは見当たらなかった．

本研究では，上記 (1) の問題意識を起点とし，(3) で述べたように，海外の継承日本語教育を目的とする保護者主体のグループについて，その実態が明らかにすることを目指した．日本につながる子どもの日本語育成を考える上で，保護者によって運営される学習コミュニティがどのような働きかけをしているのか，という大きな問いについて検討することから研究計画を始動させた (2) については，translanguaging (García & Li, 2014) と呼ばれる理論（複数言語を使用する人の言語能力を，言語間の境界を超えた「独自の言語レパートリー」と捉える考え方）を用い，従来の研究とは異なる視点で，子どもたちの言語能力を捉え直すことを試みた．

２．研究の目的

海外に居住する「日本にルーツをもつ子どもたち」が，継承日本語を学ぶ場としては，教育機関，家庭のほか，保護者が運営する小規模なグループが挙げられるが，その実態については不明な点が多い．本研究では，アラブ首長国連合（ドバイ），オーストラリア（メルボルン），韓国（ソウル）における保護者主体の日本語学習コミュニティにおいて参与観察，及び保護者に対するフォーカスグループ・インタビューを実施し，その教育活動について多角的・包括的に検討することを目的としている．具体的には，(1) 海外日系コミュニティにおいて，継承語としての日本語の育成を目指す保護者主体のグループがどのような教育活動を実践し，どういった運営上の課題に直面しているのかを明らかにした上で，(2) こうしたグループに参加する子どもたちの言語使用について，translanguaging という考え方に基づき，その主体的，創造的な言語能力について検討することを目的としている．

３．研究の方法

研究の方法は以下のようにまとめられる．

(1) 児童の継承語教育に関する国内外の研究について，参考文献及び先行研究の渉漁を行い，その概要をまとめる．幅広く文献精査を行い，現状を把握した上で，研究課題を明確にする．

(2) 継承日本語の育成を目的とした小規模なグループを運営する保護者に対し，質問紙調査及びフォーカスグループ・インタビューを行う．フォーカスグループ・インタビューは，多様なデータに効率的にアクセスできる手法であり，他者との関係性の中で相対化した自己の経験や考えを知ることができる．手順はFlick（2009）に従った．またフィールドワーク（現地調査）

により，こうしたグループにおける教育活動について多角的・包括的に把握する．

(3) 「日本につながる子どもたち」が参加する学習コミュニティにおいて，参与観察を行い，グループ内における多言語使用の状況や学習状況を把握する．具体的には，グループに参加する児童の言語使用を言語の混在，交差使用，スタイル転換，コミュニケーション方略といった観点から長期にわたり詳細に調査し，その結果を質的，個別的に分析する．

上記 (2), (3) については質的データ分析ソフトウェア（MAXQDA）及び動画・音声へのアノテーション（注釈）ツールである ELAN を用いて分析を行う．上記調査に加え， 授業担当者の役割を務める保護者から提供される授業の教案，授業報告，調査者の質問やデータ解釈に対する保護者のメールによるフィードバックの収集も行う．

表 1: 調査方法の一例（ドバイ）

データ収集	媒体	情報源	情報
フォーカスグループ・インタビュー	録音	保護者 6 名	家族構成，言語環境，継承語教育に対する意識，グループに参加した動機，グループに期待する役割・支援，使用可能なリソース（リテラシー，人的ネットワーク，日本語の使用機会）など
フォーカスグループ・インタビュー	録音	授業を担当する保護者 13 名	(上記内容に加え) グループにおける授業担当者の役割，授業内容，授業を運営する上での課題など
観察（計 10 グループ）	録画 録音	児童 44 名 上記 13 名	習熟度で分けられた 10 グループ（幼稚園クラス～中学生クラス）の授業観察

４．研究成果

本研究により，以下の点が明らかとなった．

(1) 構成員の変化によって引き起こされるコミュニティの弱体化

定住外国人が少ないことで知られるドバイは，人口の流動性が高く，継承語教育活動に参加する家族も固定的ではない．海外在留邦人数調査統計2019年度版によれば，ドバイの定住日本人はわずか2.3%である．当該コミュニティへの参加者も全員が非定住者であり，日本への帰国予定があると回答した人もいなかった．こうした背景から，中核となって活動を支えた保護者が欠けることや，子どもの日本語習得への希求の程度が異なる家族が新たに参入することにより，頻繁に摩擦が生じ，コミュニティの弱体化が起こっていることが明らかとなった．

(2) 人的リソースの慢性的な不足

国や地域にかかわらず，多くの自助グループでリソース（場所・活動資金・教材など）の不足は深刻な課題である（ダグラス, 2020）．しかし，ドバイにおけるグループは人的リソースの調整において，大きな課題に直面している．世界でも類を見ない経済発展を遂げたドバイは，人口の流動性が高く，グループに参加する家族が固定的ではない．保護者の役割は,教員、アシスタント，行事の企画・運営，会計，図書管理など，多岐にわたるが，定住者がほとんどいないドバイでは長期的展望に立った人材の育成が極めて困難である．

(3) コミュニティ運営に対する保護者の価値観の共有

調査対象となった複数の学習コミュニティにおいては，子どもが継承日本語にどのように向き合い，どのように習得していけば良いのか，という点について，保護者の間で一定の共通認識が形成されていた．一例として，ドバイのグループでは日本の学事暦に合わせ, 3 月

に終業式を行うことになっているが，子どもたちは式で歌う国歌を練習していた．こうした日本の学校で形成されるスクリプト,つまり「ある特定の場所や時間にふさわしい行為や言語表現の系列（Schank & Abelson, 1977）」を子どもたちが習得することに対し，保護者は肯定的な態度を示しており，言語能力のみならず，こうした「日本的な行為」の教示をグループに期待していることが明らかとなった．

(4) 学習コミュニティにおける教育活動とその有用性

ドバイ，メルボルン，韓国の複数の学習コミュニティにおいて調査を行った結果，保護者主体の小規模なグループは，子どもたちの継承日本語教育にとって重要なドメインであることが明らかとなった．また，社会的インタラクションを目的とした活動（例：日本の祖父母に手紙やメールを書く）やグループ内の人的ネットワークは日本語の使用機会の確保と学習意欲の向上に寄与していることが分かった．

上記の研究成果は，学会及び研究会等で発表するとともに，継承語教育に携わる教育者に対しても広く発信した．一例として，海外に暮らす「日本につながる子ども」の継承語としての日本語教育をテーマとしたシンポジウムを主催し，2001 年から日本語児童文庫「メルボルンこども文庫」を主宰する渡辺鉄太氏にご講演いただいた．講演内容は，文庫開設の経緯，その内容や意義，多文化多言語社会におけるバイリンガリズムとバイリテラシー，子ども時代と物語の大切さ，オセアニア地域における日本語児童文庫活動の活発化等，多岐に渡り，継承語としての日本語教育に対する理解を深めることができた．また，継承語教育を目的としたグループの立ち上げを目指す保護者を対象とした冊子を作成し，配布を行った．こうした試みにより継承語としての日本語教育に関わる新たな人的ネットワークの構築が実現された．

【参考文献】

ダグラス昌子（2020）.「米国における継承語教育：アドボカシーと連携の大切さ-日本における継承語教育への示唆」ICU 主催講演会「継承語教育を考える」講演資料.

Flick, U. (2009). *An Introduction to Qualitative Research*. SAGE.

García, O., & Li, W. (2014) *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London, UK: Palgrave Macmillan Pivot.

Schank, R. C., & Abelson, R. P. (1977). *Scripts, plans, goals and understanding: An inquiry into human knowledge structures.* Lawrence Erlbaum.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 谷口ジョイ	４．巻 6
２．論文標題 書評：近藤ブラウン 妃美，坂本 光代，西川 朋美（編集）　『親と子をつなぐ継承語教育 ―日本・外国にルーツを持つ子ども』 くろしお出版，2019	５．発行年 2020年
３．雑誌名 KLA Journal	６．最初と最後の頁 13－16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷口ジョイ	４．巻 5
２．論文標題 多言語環境にある子どものことばに対する質的研究の意義と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 KLA Journal	６．最初と最後の頁 14－25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00077102	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 海外の小規模自助グループにおける継承日本語教育 ―ドバイの事例に基づいて―
３．学会等名 第41回 異文化間教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 海外に暮らす「日本につながる子ども」の言語を考える
３．学会等名 SIST研究交流会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 A qualitative approach to young Japanese children’s biliteracy practice
３．学会等名 外国語教育メディア学会 メソドロジー研究部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 多言語環境にある子どものことばに対する質的研究の意義と課題- 逸脱した事例の再評価 -
３．学会等名 第40回 異文化間教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 メルボルンの小規模自助グループにおける継承語教育
３．学会等名 東京移民言語フォーラム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 English Literacy Retention in Four Pairs of Japanese Returnee Sibling
３．学会等名 LINGUAPAX ASIA 第10回国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 海外日系コミュニティにおける保護者主体の継承日本語教育 ―人的流動性との関係から―
３．学会等名 第42回 異文化間教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷口ジョイ
２．発表標題 ドバイの小規模自助グループにおける継承日本語教育
３．学会等名 日本質的心理学会第17回全国大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 谷口ジョイ	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 192
３．書名 Biliteracy in Young Japanese Siblings	

１．著者名 谷口　ジョイ	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 208
３．書名 Biliteracy in Young Japanese Siblings	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関